

青年期のふれ合い恐怖心性と自己愛

——友人との関わり方の違い——

○栗田将¹・浴野雅子²・森永康子²

(¹ 広島文教大学大学院人間科学研究科・² 広島文教大学人間科学部)

問題と目的

青年期は人々が社会に踏み出し、新しい世界で活動を始める時期である。ふれ合い恐怖心性とは、他者との関係性や自己の在り方について関心が低く、ただ漠然と対人関係から退却する心理的傾向である(伊藤, 2013)。過去の研究では自己愛とふれ合い恐怖心性の関連について検討されてきた。本研究では両者を組み合わせたサブタイプ(クラスター)にはどのようなものがあるのか、また、それぞれのクラスターがもつ友人関係の特徴について探索的に検討することを目的とした。

方法

参加者 A 大学生 96 名(M=19.38 歳, SD=1.07)。
質問項目 ①小塩(1998)の友人関係尺度(岡田, 1993)から、「気遣い」「積極的楽しさ」「一線を引いた付き合い方」「集団同調」「自己開示的関わり」の 5 因子($\alpha > .52$), 計 27 項目を用いた。4 件法。②溝口ら(2015)の自己愛的人格目録(相澤, 2002)から「過敏性」25 項目と「誇大性」16 項目の 2 因子($\alpha > .86$), 計 41 項目を用いた。5 件法。③溝口ら(2015)のふれ合い恐怖的心性尺度(岡田, 2002)から「対人退却」11 項目($\alpha = .81$)と「関係調整不全」7 項目($\alpha = .13$)の 2 因子, 計 18 項目を用いた。4 件法。各尺度については確認的因子分析を行い、 α 係数を算出した。

結果

自己愛とふれあい恐怖的心性の尺度を投入し、Cluster 分析(ウォード法)を行った(図 1)。Cluster 数はデンログラムより 3 が適当と判断した。Cluster1「平均型」: 全ての尺度が平均値に近い。Cluster2「脆弱他者回避型」: 過敏性自己愛と対人退却が高く、誇大性自己愛が低い。Cluster3「対人関係安定型」: 過敏性自己愛と対人退却が低く、過敏性自己愛と関係調整不全が平均値に近い。

友人関係の関わり方について、クラスター間の差

図1 クラスター分析の結果

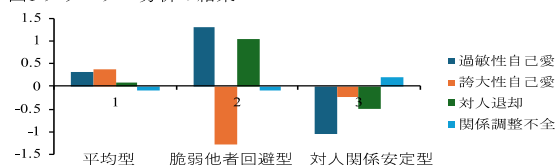


表2 友人関係尺度の各因子の平均値と標準偏差

	平均型 (n=55)	脆弱他者回避型 (n=11)	対人関係安定型 (n=30)	F値
気遣い	2.76 (0.45)	2.97 (0.38)	2.60 (0.43)	3.43*
積極的楽しさ	2.79 (0.77)	2.73 (0.90)	3.10 (0.62)	2.21
一線を引いた付き合い方	3.01 (0.44)	3.05 (0.50)	3.02 (0.58)	0.03
集団同調	2.20 (0.57)	2.76 (0.63)	3.01 (0.54)	0.74
自己開示的関わり	2.70a (0.65)	2.15b (0.64)	2.68a (0.54)	3.41*

**p<.01, *p<.05, +p<.10.

異なるアルファベットの間有意な差あり

異を検討した(表2)。その結果、自己開示的関わりにおいてクラスター間に有意な差が見られ、「脆弱他者回避型」は他の2つのクラスターより得点が低かった。

考察

自己愛とふれあい恐怖的心性を組み合わせたところ、3つのクラスターが得られた。これらのクラスターが持つ対人関係の特徴として、「平均型」は、適度に自分を認め、相手を尊重しつつ、自己主張ができる関わり方、「脆弱他者回避型」は、他者からの評価に過敏ではあるが、賞賛はあまり求めない関わり方、「対人関係安定型」は、他者への過剰な不安はなく、人との関わりを極端に避けず、適度に関わろうとする関わり方が考えられる。

友人関係に関しては、自己開示的関わりのみならずクラスター間の差異が見られた。「平均型」は、全てが平均的であることから、適度な安心感と対人緊張が過度でないため、自己開示的関わりが高い。「対人関係安定型」は、過敏性自己愛と対人退却の低さから他者評価に過敏でないかつ、傷つきが少ないため、自己開示的関わりが高い。対して、「脆弱他者回避型」は、他者評価に過敏な反面、誇大性自己愛の低さ、対人退却が高いことから、批判への恐怖、対人場面の不安が生じ、自己開示的関わりが低いのではないかと考えられる。

本研究の問題点として、ふれあい恐怖的心性尺度の「関係調整不全」の信頼性が低かったことが挙げられる。今後は、尺度の再検討やそれぞれのクラスターの特徴を他の側面からも検討する必要があると考えられる。